（ 続紙 1）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	Sonam Kinga
論文題目	Society, Kingship and Politics: A Study of the Democratization Process in Contemporary Bhutan （社会、王権、政治―現代ブータンにおける民主化過程の研究―）		

（論文内容の要旨）

本論文はブータンの民主化過程の研究である。1950 年代以降の漸進的な民主化過程をふまえながら、2000 年代に入ってから行われた第 4 代国王の主導による議会制民主主義（上院と下院の 2 院制）と成文憲法の導入という出来事をとおして、ブータンの政治と社会を論じている。

その際、本論文が焦点化しているのは選挙という出来事である。それは、選挙という競合する場において、これまで見えにくかった政治的関係や文化的枠組が可視化されるからである。そのため、本論文の著者は、ブータン東部のタシガン県において臨地調査を行いつつ、2007 年にその選挙区から国会議員選挙に立候補し、初代の上院議員となっている。本論文は、その際の参与観察と、それに引き続く 2008 年の下院の国会議員選挙の調査や、議会活動をとおして得られた民族誌的資料を中心に書かれている。調査期間は、2007 年から 2008 年にかけての国会議員選挙期間中を中心に、2005 年から 2009 年までである。

本論文のイントロダクションにおいて、ブータンの民主化過程は、過去の君主国家における民主化過程とは大きく異なることが論じられている。ブータンの君主制は、統治の根拠としての神聖さをもたず、20 世紀初頭に国民の代表と交わした統治の「契約（*genja*）」に根拠づけられており、その結果、歴代の王は社会経済的発展や政治改革をすすめることとなった。この意味で、他の君主国家のように近代世界で生き延びるために立憲君主国となり、その儀礼的象徴としての王におさまるといった民主化過程と大きく異なるとしている。さらにこのようなブータンの事例は、君主国家を過去の遺物とするさまざまな民主化過程論（例えば、S. M. リプセット）にたいする問題提起となると論じている。

第 1 章では、20 世紀初頭からの王権と政治に関する概観がなされ、第 2 章で、第 4 代国王によって導入された憲法が、王の主張とは異なって、「王からの賜物」とする言説が憲法草案作成から発布にかけて生みだされる過程が分析されている。第 3 章では、国会議員選挙を管理する選挙委員会の設置とその制度化が示されている。第 4 章では、国会議員選挙に先だって行われた 2 回の模擬選挙の実態が描かれ、この模擬選挙での結果が、予想に反して、王を代表していると連想させるイメージの模擬政党に大多数の票が入ったことが示されている。

第 5 章では、論文の著者自身による上院議員選挙が描かれている。上院議員は政党への所属が禁止されるため、選挙では候補者と地域との関係が重要となる。ここでは、地域における差異や敵対関係が選挙をとおして持ち出され、地域というものが選挙人

たちによってどのように再想像されるかについて議論がなされている。

第 6 章と第 7 章では、下院議員選挙の詳細な記述と分析が行われている。上院議員とは異なり、下院議員は政党に所属して選挙に臨むため、下院議員選挙は政党間のさまざまなキャンペーンや駆け引きの中で行われる。実際の選挙結果は、DPT（Druk Phuensum Tshogpa、国民総幸福党）が、PDP(People’s Democratic Party、人民民主党)を大差で破って勝利した。著者は、この選挙結果には多様な要因が絡んでいるが、重要な要因はモラルであり、このモラルは王との関わりでしばしば意味づけられると指摘している。著者によれば、この選挙において、両者のスローガンやイデオロギーに大差がなく、候補者は共に第 4 代国王に仕えた大臣や官僚たちであった。しかし、選挙キャンペーンで展開された情報合戦において党首のモラルが問われることとなった。PDP 党首は、大臣を歴任してきており、これまでの村落開発などでの成果を主張した。これに対して DPT 党首は、これまでのすべての過去の成果は国王によるものであり、国王に仕えた大臣がその成果を我がものにすることはできないと主張した。また、DPT の名前は、つねに第 4 代国王の主導した国民総幸福を連想させ、王との関わりで政党の評価を高めたと著者は選挙結果を分析している。

第 8 章では、実施が遅れている地方選挙について分析している。国会議員に求められる大学卒業以上の学歴を備えていないため、国政選挙への立候補の機会を奪われた各地の有力者を中心として、さまざまな人たちが、地方選挙に向けて活動し始めていることを叙述し、地方での政治変動の一端を明らかにしている。

結論では、これまでの議論をふまえ、ブータンの社会と政治における中心的な存在としての君主制が、国会議員選挙の過程と結果に強く影響を与えており、ブータンにおける民主主義は王権と君主制を抜きに理解することはできないとしている。また、議会制民主主義の導入によって、地方の人たちにもさまざまな政治的交渉の機会が拡がりつつあると同時に、さまざまな政治的関係における差異や競合の可能性が生みだされつつあるとしている。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

ブータン研究は活発であったとは言いがたい。これまでのブータン研究は、ブータン王国が、1959 年のチベット民衆蜂起以降、インドと中国の緩衝地帯として注目を浴びたことが主たる契機となっている。それらの多くは、1970 年代に第 3 代国王に関わった限られた数の研究者やアドバイザーによってなされたものである。その後、第 4 代国王（在位 1972-2006 年）は国外の研究者の立ち入りを厳しく制限した。外国人には門戸が開かれず、ブータン国内からの発信は少なかった。近年になってようやく、ブータン国内（例えば、ブータン研究センター）からの研究成果が出はじめている。しかしそれでも、政治に関する実証研究や村落社会の臨地研究はまだほとんど存在しない。

こうした状況を踏まえると、本論文の学術的価値は高い。第 1 に、本論文はブータン人によるブータンの政治と社会に関する研究成果である。著者は、ブータンにおける国家と地方政治との関係に興味を持ち、公用語のゾンカ語、調査地の地方言語を自在に用いながら臨地研究に着手した。調査中に上院議員選挙の実施が決まり、著者自身が立候補した。自ら当事者となり、当選に向けて悪戦苦闘を重ねる中、政治の場面でのさまざまな文化的枠組や社会的関係の重要さを身をもって体験した。しかも上院議員に当選することによっていわばインサイダーのような立場から、その後実施される下院議員選挙や地方分権を生々しく観察している。そして、このような調査を行えたがゆえに、ブータンの民主化は、国会においても、地方村落においても、王との関係（例えば、王からの賜物としての憲法）を抜きに理解も説明もできないことを民族誌的に明らかにし、ブータンの民主化過程と民主主義の重要な特徴を初めて学問的に明らかにした。この意味で、ブータン社会と政治に関するこうした参与観察と分析は画期的な金字塔であり、ブータン政治に関する先駆的な研究として久しく参照されるであろう。

第 2 に、本論文はブータン地域研究への多大な貢献となっている。既存の文献資料の少ない中、ブータンの民主化過程を論じるために、20 世紀初頭からの君主制の成立過程（第 1 章）を論じ、さらに 2000 年代に入ってからの憲法制定過程（第 2 章）、模擬選挙と国会議員選挙の実施（第 4 章、5 章、6 章、7 章）、地方選挙の前哨戦の状況（第 8 章）などの詳細な記述と分析を行った。その際、各章にはブータン社会と歴史に関する初出の資料や洞察が多数含まれており、これらがブータン地域研究に大きく貢献している。

第 3 には、このようなブータンにおける民主化過程の詳細な検討が、これまでの民主化過程論（例えば、S. M. リプセット）を再検討する貴重な事例を提供している点である。本論文は、かつて欧州やアジアで起こった民主化運動や内乱といった内的圧力や、他国からの外交的な圧力などからの民主化ではなく、現代ブータンにおける王主導の社会経済発展と民主化過程を詳細に明らかにしている。この啓蒙的君主主導の民主化という事実は、比較政治学の分野で取り組まれている民主化研究に、視野の拡

大を迫る新たな一石を投じていると言ってよい。

以上のように、申請者の論文は、本研究科にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果として判断される。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 8 月 5 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。